



Title	賛助会員募集のお願い／『モンゴル研究』投稿規程・ 執筆要領／編集後記
Author(s)	
Citation	モンゴル研究. 2008, 25, p. 76-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

賛助会員募集のお願い

『モンゴル研究』は1975年の2月に創刊されたモンゴル研究のための研究誌です。僅か101頁のタイプ孔版印刷から始まった小誌は、毎号着実な実績を積み上げ、いまでは内外の研究者を中心に、広範な支持と高い評価を得ています。

1984年からは、賛助会員制度が発足し、創刊当時からお世話になった故司馬遼太郎さんをはじめ、多くの方々から、暖かいご支援を頂戴して参りました。

今後とも、『モンゴル研究』の在り方にご賛同いただき、ひとりでも多くの方が賛助会員となっていただけますよう心から希望いたしております。

尚、賛助会員についての要綱は以下の通りです。

モンゴル研究会賛助会員要綱

- 賛助会員とはモンゴル研究会の趣旨およびこれまでの研究会活動とのその意義に賛同し、会の活動、運営には直接参加せず、その周囲にあって、この会を育てていこうという善意から財政的に支援する個人、または団体である。
- 賛助会員は賛助会費（年間1口5,000円、何口でも可）を定期的に納入することで財政支援を行い、『モンゴル研究』の贈呈を受ける。
- 賛助会員は、モンゴル研究会の趣旨や活動に異議がある場合、あるいは個人的な理由によって、いつでも自由に退会できる。

既に賛助会員となって下さっている皆様、ご支援、誠にありがとうございます。ご支援いただいたすべての方々のお名前をここに掲げて、御礼を申しあげるべきところですが、個人情報保護の観点から、賛助会員名簿掲載は控えさせていただいております。何卒、ご理解下さい。

また、会員、賛助会員の皆様の個人情報管理につきましては、法令を遵守し、今後とも、十分な注意を払ってまいります。

『モンゴル研究』 投稿規程・執筆要領

＜投稿規程＞

1. 名称及び発行

本編を『モンゴル研究』(JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES)と称し、原則として毎年1回発行する。

2. 投稿資格

投稿できる者は、原則として、モンゴル研究会会員に限る。ただし、次のいずれかに該当する場合には投稿を認めることがある。

(1) モンゴル研究会の依頼により、モンゴル研究会で講演、発表等を行った非会員。

(2) その他、会員の推薦があつて、編集委員会が適当と認めた者。

3. 投稿内容

モンゴル研究に関する未発表原稿で、原則として研究会の月例会などで報告したもの。その種類は論文、研究ノート、調査報告、翻訳などで、編集委員会が適当と認めたもの。

4. 原稿の分量及び様式

(1) 原則として、原則として、論文は50枚以内(400字詰め原稿用紙換算、図表や注を含む)、研究ノート30枚以内(同)。その他の原稿も50枚を超えない。制限を超える長文原稿は、編集委員会の承認によって受理または分割連載されることがある。欧文・モンゴル文の場合も、これに準じる。

(2) 原稿の様式や提出方法については、別掲の執筆要領に準じる。

5. 原稿の締め切り

投稿を希望する者は原則として、8月末日までに編集長にその旨を申し出、原稿の締め切りは原則として、10月末日とする。査読による修正の再提出期限は編集委員会が定める。

6. 原稿の提出

(1) 完成した原稿1部と電子ファイルを編集委員会へ提出する。

(2) 原稿は指示された形式の電子テキストで作成し、フロッピーディスク等を添えて提出する。

7. 論文等の審査及び掲載の可否

(1) 編集委員会は、審査の結果、必要ならば原稿の修正を求めることができる。

(2) 編集委員会は、審査の結果等に基づいて掲載の可否を決定する。

8. 校 正

校正は執筆者の責任において行い、原則として再校までとする。

9. 掲載及び別刷りの経費

(1) 掲載に要する経費は原則として無料とする。

(2) 別刷りを希望するものは編集長にその旨を、必要部数とともに申し出る。別刷りの費用は希望者が負担する。

(3) 執筆者には掲載号を1部進呈する。

10. 出版権利用の許諾

投稿者は、モンゴル研究会に対し、当該論文に関する出版権の利用につき許諾するものとする。

11. 論文等の電子化及びコンピュータ・ネットワーク上での公開

(1) 論文等は、電子化し、ホームページ等を通じてコンピュータ・ネットワーク上に公開することがある。

(2) ただし、執筆者が電子化・公開を希望しない特別の理由を有する場合は、編集委員会に申し出て、当該論文の電子化・公開を拒否することができる。

＜執筆要領＞

1. 原稿について

(1) 原稿用紙はA4を使用、1ページ＝40字×40行とする。

(2) タイトルの後には執筆者名のみ記し、所属、肩書きなどは一切記入しない。但し海外からの投稿には、末尾に(内蒙古大学)などのような情報をふる場合もある。

(3) 原稿にはタイトルおよび執筆者名の英文表記を添える。

(4) 本文の形式

本文は横書きとする。特に希望のない場合は、章立ての形式を右の通りとする。

(5) 図表

図表を入れる場合は、図表のタイトルに通し番号(図1、表1等)を付ける。本文中での図表の位置を明示する。

(6) 註・参考文献

1) 註は文末註の形式とする。

2) 参考文献リストの書き方は原則として下記の通りとする。

①日本語文献

論文の場合

著者名(発行年)、「論文名」『掲載雑誌や本の名前』雑誌号数、発行所か出版社名

例) フフバートル(1999)、「『内蒙古』という概念の政治性」『ことばと社会』第1号、三元社

本の場合

著者名(発行年)、『本の名前』発行所か出版社名

例) 坂本是忠(1974)、『辺疆をめぐる中ソ関係史』アジア経済研究所

新聞の場合

『新聞名』(何年—何年)

例) 『朝日新聞』(1995—2001年)

②モンゴル語、ロシア語、英語など欧文文献の場合

論文の場合

著者名(発行年)、「論文名」『掲載雑誌や本の名前』掲載号数、発行所か出版社名

本の場合

著者名(発行年)、「本の名前」発行所か出版社名

例) П.Шагдалсүрэн(2000)“Миний мэдэх маршал Х.Чойбалсан”, Улаанбаатар

* [] でくくって翻訳する場合もある。

例) [シャグダルスレン(2000), 『私の知るチョイバルサン元師』ウランバートル]

新聞の場合

“新聞名”(何年—何年)

例) “Үнэн” [ウネン モンゴル人民革命党発行紙](1945—1996年)

③中国語の場合

基本的に、日本語文献と同じ。

例) 張大宣(1983)、『外蒙古現代史』第4冊、蘭溪出版社、台湾

(7) 提出された原稿は返却しないものとする。

2. 原稿の提出

上記の原稿とともに、原稿のファイルをいれたCDまたはフロッピーディスクを提出する。文書ファイルと図表ファイルは別々のファイルにいれ、文書ファイルはテキスト形式(.txt)、リッチテキスト(.rtf)、あるいはワード(.doc)とし、図表ファイルは、原則エクセル(.xls)とする。その他の場合および、写真を画像ファイルで提出する場合は編集委員会と相談する。また、使用ソフトのバージョンも明記する。プリントアウトした図表の原稿を必ず添える。モンゴル語についてはモンゴル語が正しく打ち出された原稿、テキストファイルの他に、独自の入力方式による場合はモンゴル語フォントを明記し提出する。必要な場合、モンゴル語のフォントも送付する。

はじめに(序、序文など)
I
1.
(1)
II
.
.
.
おわりに(結び、結論など)

編 集 後 記

◇日本におけるモンゴル研究の歴史は 100 年を少しこえたところである。今日、誰でも、いつでも、自由にモンゴルで現地調査や研究をすることが可能だ。しかし、わずか、20 年ほど前、自由な現地調査など想像もできなかった。そのことを思えば、30 年以上前に創刊された『モンゴル研究』が、まがりなりにも 25 号を数え、その記事すべてが著者それぞれのモンゴル体験を原点としていることは、まことに感慨深い。

◇本号には、自然科学、社会科学、人文科学、芸術にわたる労作が並んでいる。碩学の論文の隣に留学からもどったばかりの若い研究者たちの仕事も紹介されている。そこに、磯野富士子先生を偲び、先生が学生に語られたモンゴル体験を付すことにした。

◇本誌創刊以来、いつも優しく応援して下さった磯野富士子先生は、2008 年正月、逝去された。一般に、どこのどんな地域の研究であれ、一旦、フィールドに入れば、とらえどころのない現実との格闘で、一体自分が何をしているのか分からなくなってしまうような場合が少なくない。磯野先生が示された、観察対象に対する深い共感と自己を見つめる真摯な姿勢は、われわれ、そして、これからのモンゴル研究者にとって、こころの羅針盤となるはずである。

◇さて、25 号もまた、アルド書店と吉本さんに多大な負担をかける結果になってしまった。その反省から、編集委員会としては、今後、本誌のさらなる充実とともに、編集作業の見直しを行うつもりである。

◇『モンゴル研究』は、財務面でも、真剣な検討が必要な時期にさしかかっている。本誌を支えるのは会員と賛助会員であり、その会費や賛助会費がなければたちゆかない。海外では、老舗の新聞や雑誌が廃刊になったり、電子版に移行したりしつつある。本誌も役割の変化に応じて、その姿を変えるべき時が近づいたのかも知れない。

◇会員、賛助会員のご協力に感謝を申しあげるとともに、会員諸子、読者諸氏に、忌憚のないご意見をお寄せ下さるようお願いして、未曾有の経済危機の中、ウランバートル第 3 ホローへと旅立った編集長のピンチヒッターとしての筆を擱きたい。

(芝山 豊)